天蚕飼育の現状と未来について

信州大学学術研究院繊維学系
附属農場野蚕研究センター
教授 梶浦善太

1970年代から1980年代にかけて、養蚕農家の中には県の指導によって天蚕生産へ変更する農家があった。天蚕の生産が最も多かったのは平成3年度(1991年)であった。その年の蚕業に関する参考統計には31県139市町村367戸において、1,373,815頭の天蚕が飼育され、繭728,034粒、重量にして5,006kgの繭が得られた記録が残っている。それ以降、バブル景気の崩壊とともに天蚕の生産は減少していった。平成7年度(1994年)には繭生産量が277686粒と平成3年度の半分以下となり、平成17年度(2005年)には99321粒とさらに減少した。バブル景気の崩壊以降、農家の高齢化と後継者不足、生産効率の低さ、製品の生産販売の難しさもあって天蚕飼育をやめていく農家が増えたのである。平成18年度(2006年)の統計では87697粒となってさらに減少した。その年では13の都道府県、21の市町村に48戸の飼育農家があった。これが最後の統計になって日本国内の天蚕生産の状況はわからなくなった。私たちが15年後の2021年に調べたところ12の都道府県で15の個人・団体が天蚕を飼育していた。その方々に2016年から2021年までの収繭量をおたずねしたところ、2016年から2019年にかけて総収繭量は約61000粒、約69000粒、約74000粒、約51000粒であった。いただいた回答の中には2016年から2019年に未記入であるところがあったので、実際は70000粒から80000粒に増えて約60000粒に減ったと推測している。2020年と2021年では、約58000粒、約58000粒と横ばい状態であった。この2年間の回答に未記入がなく、それらの数値は実際の数値に近いと考えている。

天蚕生産者・団体の背景は二通りに分かれている。一つは、江戸時代から天蚕の歴史がある長野県安曇野市穂高有明と広島県広島市可部、もう一つは、昭和時代に家蚕の養蚕が盛んであった地域で平成時代以降に天蚕を始めたところ、例えばしょうぜん天蚕の会、群馬県中之条の登坂天蚕工房、富山県八尾市のがうん天蚕の会である。最近では、令和3年(2021年)に奄美大島で奄美天蚕(*Antheraea yamamai yoshimotoi*)を大島紬に利用する活動が始まっている。

調査の結果から、天蚕繭の生産量が多いところの共通点が明らかになった。①元養蚕指導員の支援、②自治体の支援、③ボランティアの参加、④製品販売、⑤大学の支援、これらのいくつかの要素があるところは天蚕の生産量が数千頭以上だったのである。独立している個人の天蚕生産者でも過去には五つのどれかと接点があった。

本学部附属農場(野蚕研究センター)では天蚕卵(種)を毎年約4万粒用意して天蚕飼育者のリクエストに応じてきた。新型コロナ禍後、天蚕卵の配布量は特に減っていない。最近3年間でどれくらい天蚕繭が生産されていたのか3年ぶりに調査を始めるところである。

最後に天蚕の未来についてである。これまでは繭と天蚕糸の利用に限られていたので観光資源にはなるが、製品としては需要が少なくビジネスに発展するかどうか難しかった。そこで、別の利用としては、10年ほどブームになっている天蚕昆虫食の実現可能性を試してみることを示唆しておきたい。